

二十行 二段

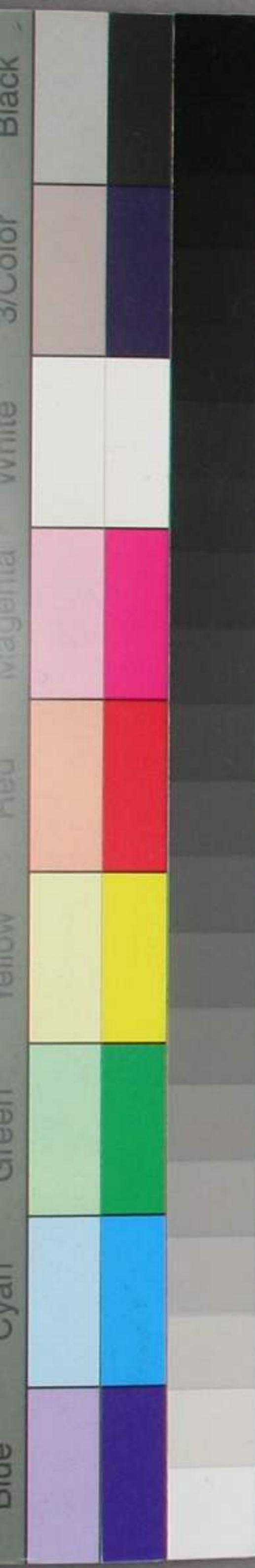


画室の南窓

森田恒友

浦上玉堂の画を、新はあんまり観て居る
が、はつきりしたことは言へないが、兎も
御彼れは幕末の南画家中の逸才に堪相違な
い。何れも少し許りか、しか観ては居るが、
まあ幕末の南画家として彼は、彼れと同田半江と
とを挙げてもよいが、思ふの如く。去年の秋三越
で恒展をやったが、橋本潤雪が、自分の裁幅

本問文庫
文庫 14
A 132



引

を展べた中には、玉堂の三四幅があつて、それ
あつてもかゝりな面白味を、~~紙面~~現はして居
た。
見せたくれ。

彼れの画は、私に分て、~~左~~感心して言ふと、
筆に任して紙面をかき廻して居る、~~驚~~くしさを、
私にはあんまり好きではあつた。幕末頃の南
画、文人画に大抵、~~硬~~い長毛筆を用ひて、~~三~~
分の~~内~~内容を十分に描き出し居るよふな、
覽者の感心があるが、玉堂にもやつぱりそれか
ある。而して彼れの画は、それ程かゝりに力強

1020 (YH特製)

引

く、又何が暗示の内容を會んで居るといふと
それ、~~画~~画を面白くして居る。それ、~~又~~
私に~~玉~~玉堂の画に感心し敬服するものは、彼
れの画、~~画~~画につけて、~~黒~~黒が、~~紙~~紙背に深く、~~強~~
~~透~~透つた、~~点~~点だ。彼れの画に於いて、~~全~~
く所謂「~~墨~~墨紙背に透る」といふ語を適切に感心
する。彼れの画の、~~点~~点の一点は、全く私の感服する
ところだ。其の一点を、~~も~~もつてして、~~彼~~彼れ
も亦たしかに紙本墨画の、~~長~~長家、~~新~~新筆、
大抵、~~紙~~紙面に於いて、~~墨~~墨は、~~内~~内輪に、
二

びい
 後したよふであつて、實は其内容に奥の奥の
 滋味を湛へたのに比ると、五世あとの漢し
 女界は、如何にも狼藉極まるものらしい。彼
 水の画河を蔽へんと、其狼藉に魅力がある。
 左に頃の多々の文人画家等の描いたもの
 を見ると、其気取り方の情味を極め、
 のあつぬあつたものがあるのに比べると、彼
 水の狼藉は恐らく後水の本物あつたあつた。
 なが、後水の画あつたに接しても、亦感ある
 と、こゝに、明清の支那の画が、何れ自然を

2

はちして、宦遊の分子を各分に備えて来た
 と、公に、多寡や持ち味は遠小に
 して、幕末の南画にも亦共通したものが
 ある。彼水等は何れも、何れに自然か、遠か
 かつて、宦遊の快樂をあらはし出した。すこ
 ぶる危あいな旅に探しよせしよつた
 のに、其為め、今の支那に一つの観るべき
 作を生れ、あつた。日本の南画も、
 振はあつた。しよつたと言つてもよ。何
 んて、其の中は、先へくと、はかり行きたか

るものたが、とんりもい湖戸際に来たこと
 とを知りずには、昔先へ一歩進んで、ついで、
 忽ち穴へ落ち込んでしまふ。昔を一つ、路の
 出で来るところへ行つて見ると、さうさう、
 根を掘し直して見ると、~~穴~~の奥の奥の奥、
 以上、墮物は急に深くあつてしまふわね
 海あらしぬ。昔の皮肉家の言ひ草にはありが、
 塵を掃くには、紙の白さでは物足りぬ。かゝる
 粉をつける。それと、赤を足りぬので、胡粉
 を積り上げる。胡粉さへ多くつけると、塵に

1020 (V H 特製)

虫類を

まさかに

ると思ふ。可笑しうことではある。
 や鳥羽信正草前、下つ腹へ波を打たせて、
 大笑する。その言ひを、
 胡粉を積り重ねる愚は、学はぬにして、
 く塵を掃くことは、~~むかし~~純白に、~~やわら~~
 かに、何とも言ひない。塵の清美を、
 をつけねば清美とて、言ひつゝ、
 描くこと、~~ま~~ま出すことは、少し、
 した画術の、決して容易くするところ、
 本當に
 修練

いよゝに感じる。

雪月記と並べると、~~日本~~ 日本の自然

繪美の中では、恐らく雪の一番多く画に描か

れたとくに思ふ。それは月に比べ

~~難~~に比べるより、より多く雪の景情の方が

画的である。花に比べて、より多く雪の方が

~~月~~ 深く、雨連れの山家の節々

も、~~海~~ 海濱の漁夫も、万燈あかしく

る。それだけ、~~雪~~ 雪の画も、~~美~~ 美を

極め、其の雪を描くことのむづかしさを、~~私~~ 私

と、何年とあく味はつて居るが、今

のよゝに、春にあつても寒さが厳しく、庭に

積つた雪が、~~日~~ 日ごとく解けあいて、真白くあ

ら、~~居~~ 居る美しさを、毎日見て居るが、

手を出すのが、~~秋~~ 秋にあつた。勿論私

は雪景に對つて、~~秋~~ 秋の数々、~~油~~ 油絵の具の相を

持ち出すと、~~小~~ 小気は、~~起~~ 起るあり。それは

~~先~~ 先、~~津~~ 津の雪を見に行つて、~~其~~ 其雪国の

雪を見て、つくづく、~~油~~ 油絵具の不適當なことを

感じ、~~し~~ したが、~~私~~ 私は大

には、油絵の具
を持ち出すよ
りは、未知水
墨紙本を持
ち出す方が、
雪の味に
かゝる感
銘に近りの
を表現し易
いのだ。

い雪景を描く時は、墨を画の空ををし、
雪水之又水墨で紙本に描き、
すゝのたか、とくも氣に入るよくあつたか
出るといのに疵痕を起しかつた。かか近頃の私
別 一 体月ひの花(様)でも、雪でもたか、こゝい
ふ一般的に、仇の垢程ひの自然の趣味を解し
得るものには、超然美と云ふ自然美と云ふものは、
总体文章にも画にも、**あつた** つかしいものらしく思
はれる。尤も月ひの**あつた** つかしいものらしく思
ふ美しさとりつものほ、其中には画的である

い分子の多分に含まれて居る美しさかもの心
か、到底画かけでは感心しなけれの美しさは
出しにくい。尤もは花、雪、
月に比つると、花や雪は、
に画的分子が多分である為めの美しさかものが、
尤もはこれにも係らぬ、之れ等の**自然美**と
本意に深く描き現し得る画は、古来描めて
多々あるといふが、尤も古来一般世人の所
謂**平** 俗趣味者**の** 描き得るに眺められ、
月雪をあら、りし自然の**超然美**には、丁度若か

が、

板の雪景沖舟と見せ^て昔の^{はえ}が、^{はえ}とくも矢立
あふ^{はえ}心し^{はえ}た^{はえ}出来に接し^{はえ}た^{はえ}い。とく
あふ^{はえ}りも沖舟の雪景の、^{はえ}メレンスの^{はえ}あ
~~あふ~~と^{はえ}感じの^{はえ}彩^{はえ}を^{はえ}私^{はえ}は^{はえ}感^{はえ}心^{はえ}し^{はえ}た^{はえ}い。
~~あふ~~と^{はえ}く^{はえ}メ^{はえ}レンス^{はえ}の^{はえ}あ^{はえ}く^{はえ}あ^{はえ}色^{はえ}彩^{はえ}の^{はえ}画^{はえ}面^{はえ}の^{はえ}前
に^{はえ}立^{はえ}つ^{はえ}と、^{はえ}全^{はえ}く^{はえ}縁^{はえ}の^{はえ}美^{はえ}し^{はえ}さ^{はえ}あ^{はえ}は、^{はえ}自^{はえ}然^{はえ}
の^{はえ}美^{はえ}し^{はえ}さ^{はえ}に^{はえ}比^{はえ}べ^{はえ}る^{はえ}と、^{はえ}如^{はえ}何^{はえ}に^{はえ}も^{はえ}淡^{はえ}は^{はえ}か^{はえ}あ^{はえ}も^{はえ}
か^{はえ}と^{はえ}つ^{はえ}く^{はえ}く^{はえ}思^{はえ}つ^{はえ}て^{はえ}し^{はえ}あ^{はえ}ふ。
王維の雪景~~あふ~~画^{はえ}と^{はえ}り^{はえ}あ^{はえ}も^{はえ}の^{はえ}を、^{はえ}思^{はえ}ふ
て^{はえ}是^{はえ}て^{はえ}感^{はえ}心^{はえ}し^{はえ}た^{はえ}こ^{はえ}と^{はえ}あ^{はえ}つ^{はえ}た^{はえ}。其^{はえ}画^{はえ}か^{はえ}ら^{はえ}は^{はえ}天

1020 YH特製

7

地^{はえ}盤^{はえ}々^{はえ}の^{はえ}美^{はえ}し^{はえ}さ^{はえ}す^{はえ}り^{はえ}は、^{はえ}寧^{はえ}ろ^{はえ}恐^{はえ}し^{はえ}さ^{はえ}に^{はえ}接^{はえ}せ
わ^{はえ}あ^{はえ}ら^{はえ}あ^{はえ}か^{はえ}つ^{はえ}た^{はえ}。南^{はえ}海^{はえ}や^{はえ}古^{はえ}縁^{はえ}で^{はえ}多^{はえ}く^{はえ}取^{はえ}り
あ^{はえ}つ^{はえ}か^{はえ}つ^{はえ}て^{はえ}雪^{はえ}景^{はえ}は、^{はえ}と^{はえ}り^{はえ}画^{はえ}の^{はえ}感^{はえ}心^{はえ}し^{はえ}た^{はえ}も^{はえ}の^{はえ}を^{はえ}未
知^{はえ}見^{はえ}あ^{はえ}い^{はえ}。詩^{はえ}を^{はえ}画^{はえ}に^{はえ}し、^{はえ}歌^{はえ}を^{はえ}画^{はえ}に^{はえ}し^{はえ}た^{はえ}
と^{はえ}り^{はえ}小^{はえ}心^{はえ}に^{はえ}あ^{はえ}る^{はえ}も^{はえ}の^{はえ}を^{はえ}多^{はえ}く^{はえ}見^{はえ}る^{はえ}の^{はえ}か^{はえ}、^{はえ}と^{はえ}り^{はえ}い
ふ^{はえ}の^{はえ}は、^{はえ}寧^{はえ}ろ^{はえ}自^{はえ}然^{はえ}か^{はえ}ら^{はえ}直^{はえ}接^{はえ}に^{はえ}受^{はえ}け^{はえ}入^{はえ}れ^{はえ}た^{はえ}美^{はえ}し^{はえ}さ^{はえ}
魅^{はえ}力^{はえ}は^{はえ}到^{はえ}底^{はえ}有^{はえ}り^{はえ}す^{はえ}り^{はえ}も^{はえ}い^{はえ}誤^{はえ}か^{はえ}。
何^{はえ}に^{はえ}し^{はえ}て^{はえ}も、^{はえ}雪^{はえ}景^{はえ}の^{はえ}あ^{はえ}り^{はえ}も^{はえ}自^{はえ}然^{はえ}は、
も^{はえ}も^{はえ}確^{はえ}定^{はえ}所^{はえ}へ^{はえ}画^{はえ}こ^{はえ}ら^{はえ}生^{はえ}徒^{はえ}で^{はえ}あ^{はえ}れ^{はえ}は、^{はえ}ち^{はえ}よ^{はえ}いと
画^{はえ}小^{はえ}に^{はえ}も^{はえ}描^{はえ}け^{はえ}る^{はえ}。眼^{はえ}先^{はえ}を^{はえ}急^{はえ}に^{はえ}画^{はえ}の^{はえ}明^{はえ}に^{はえ}あ

